本源を支那に歸せねばならぬが如きものだ。勿論羅馬國には哲學思想を有せし人がないのではないけれども、純然たる哲學者に至つては、眞に曉星の感なきを得ませぬ。ちちぇろー、せねか、べーしゅーす等を以て最とするが、ちちぇろーは希臘哲學の折衷者であつて、倫理學においては、實はすとあ、及びぷらとーん派を取つた。せねかは主にすとあに據りてをつたが、多少ぷらとーん派に模倣せしところがあつたことは掩ふべからざる事實である。これを要するに、羅馬國民が武を尚び又法を重んぜしこと、猶わが邦人の如く、而も且創思原造に乏しくして、模擬修飾を主としたことは我亦彼に似たりといふべきである。殊に羅馬哲學と稱せらるれども、詮じ積めれば、希臘哲學を繰返せるに過ぎざるの有樣がある。その自ら發見し創設したるものは殆んどないといふてよいほどである。想ふて此に至れば、わが邦人が印度及び支那の諸哲學を咀嚼し、これを傳播したる事績と、正に彼是伯仲の間にあるを是認するに十分である。彼のちちぇろーは我の仁齋に似、彼のせねかは我の徂徠に似てをる。然りといへども、日本哲學は能く他より繼承せるものを靈澤にし精細にし又調和的態度を執つて融合せしめたる功は確に羅馬哲學の上にあるも、決してその下風に立つものではないと思ふ。蓋し日本哲學中にはとにかくも固有なる神道なるものあり、又佛教哲學においても非常に變化せられ發揮せられたるものあり、更に儒教哲學にありても羅馬哲學の如く錯雜ならずして、何れも頗る進歩して已まざるものである。豈これを唯漫然他國の思想の反響ばかりであるといふことができようか、否、ますます調和し改進し澤麗して、やがて世界に未曾有なる一大哲學系統は新にわが邦において組織せられうとしつゝあるではないか。

若し翻つてこれを希臘哲學に較べてみるに彼は實に創思特見によつて塡充せられてをる。これに加ふるに、研尋考究も極めて詳密にして、規模も高大、旨趣も亦深玄であつて、到底日本哲學の企及すべきところではありませぬ。實に希臘人は思考力と發明力とにおいて、あらゆる人種の上に超拔せる國民であつた。彼のそくらてす、ぷらとーん、ありすとーてれすの如き儒哲は、他國において見ることはできぬが、わが邦においても不幸にして一人も現はれなかつた。恰度釋迦孔子等に比すべき者の一人も出なかつた如くである。たとひ、弘法、最澄、親鸞、日蓮等輩出ましたけれども、彼等は眞に哲學者といはんよりも、寧ろ實際家にして、本來は宗教家としての偉

人である。又勝樹、闇齋、素行、仁齋、徂徠、一齋、中齋等も競起しましたが、是等も亦主に德行教育或は事功の方面においての雄鎮として世界に耻ぢざる人物であるが、哲學上においては、皆必ず數歩をかの希臘に讓らなければなりませぬ。

佛蘭西には、哲學者として、最初てーかるとが推理的に二元論を主張せし間もなく、すぴのざーが出でゝこれに反して一元論を立て、ついてうをるてあは英國の經驗說を傳へ、更にらめとりーぼるばは唯物論を唱へしに、るーそーは自由說を以てこれに敵し、やがて又くーざんは折衷派を掬めて觀念論を主張し、近來こんと起りて實驗哲學を唱道しました。それらの影響固より大いなりしも、每に佛人自らこれを大成せず、又繼續を爲さなかつた。これ即ち佛人の輕卒にして、個人主義に偏り、何等の國民的特性を有せず、歷史的發達を貴ばざりし結果であつて、徒らに新奇なる說を吐き、雜駁の弊に陷つてをる。わが日本哲學は然らず、但此の如き雜駁なる嫌だけは、これを免るゝことはできなんだけれども、自ら古今を貫通せる特性あり、又諸派の契合せる要目がある。蓋しこれ歷史的觀念の强盛であつたことに基かはなりませぬ。

まかれども、わが日本哲學は一方においては獨立思想の養成に充分でなかつたから、この點にては、英吉利哲學に及ばず、又獨逸哲學にも及ぶことはできぬ。始終創設を缺き淺近に止まるやの觀があることは、如何ともすべからざるところで、こは即ち以て日本哲學全躰を通して著しく實際的傾向、物質的性質を帶びしことを證明するに餘りあるものにして、却つてこれが日本哲學たる眞面目を表彰して、そが理論と實際とを結合し、調和的狀態を以て既に東洋の天地に屹立し、當に世界の學界に卓絕すべき位置を確定するものと爲さなければならぬのであります。

注意、序みに支那における儒佛道三敎調和の概況をも評說する豫定でありましたが、紙數限りあれば、他日機を得てこれを公けにしたいと思ひまする。

實に日本哲學なるものは、余が不肖を顧みず始めて組織しかけたものであるから、不整頓不充分なる點が尠くないであらうけれども、幾分か以て諸子が本邦古來の思潮文運について考察せらるゝの資助にはなるに足りませう。

14
229

日本哲學終

14
229

009011-000-8

14-229

日本哲学

有馬　祐政／述

M34
AAD-0153

14
229

帝國學館第十四學年度
法學科講義錄

日本法學

有賀祐政